

P-037

対面でのピアサポート活動を継続することの意義と支援の充実を図るために必要なこと

下村 美紀、本田 睦子、福島 慎吾

認定 NPO 法人難病のこども支援全国ネットワーク

【背景】

当会ピアサポートの窓口は小児病院の一室を借りて行っているため病院との連携は必須である。パンデミックを前に当会では窓口の活動を一齐に休止する判断をした。しかし、再開に至っては病院ごとに判断に差があり、再開の時期が異なった。対面活動の休止中は電話や SNS を使ったピアサポートを行い相談機会の継続を試みたが、件数は多くはなかった。声だけや文字だけのピアサポートは難しいというピアサポーターの声が大きく、ピアサポーターのモチベーションをどのように維持していくかも課題となった。

【目的】

窓口が再開されると活動再開を待ち望んでいた声が多く聞かれた。ピアサポーターからも対面での活動を待ち望まれていた。相談者へよりニーズに合ったサポートを提供することは第一目標であるが、安定した支援を継続するためにはピアサポーターとして活動する支援者の育成、人員の確保とスキルアップ等の機会を維持していくことが必要である。そのために必要な体制をどのように構築していくかを明らかにする。

【方法】

拠点毎と電話によるピアサポート、LINE による相談について活動休止から再開の時期を比較。2022年度開設日数と相談件数を集計。実際の相談からどのような支援が求められていたのかを分析する。ピアサポーターの育成に関わる事項やピアサポーターの活動状況を集計、またピアサポーターの声も分析する。

【結果】

窓口の休止以降4拠点の再開日は再開時期が大きく異なった。電話での相談は窓口の休止後開設し、4拠点の窓口が再開するまで継続した。ピアサポーターの養成講座はオンラインで2回実施したが窓口での実習が行えずオンライン実習となった者もいた。ピアサポーターは病気や障害のあるこどもを育てている者を含むことからコロナ禍での活動を見合わせる者や、コロナ禍の休止をきっかけに引退を決断した者がいたため、再開時には休止前の活動日数や活動時間に対応する体制を整えることは難しい状況となった。

【考察】

コロナ禍の不安も相まってより不安な状況にすることが推察される相談者に対し、相談を受ける側の体制が整っていなければ、支援を提供することができない。安定した支援を提供するためには受け皿である体制の強化充実が不可欠であることは間違いない。活動場所となる病院の理解を得られるような働きかけと、ピアサポーターの勉強会などの研修、新人育成や活動の周知に力を入れていくことが急務である。

P-038

医療的ケアを必要とする重症心身障害児・者の母親が就労の際に活用した資源—2つの場面に焦点をあてて—

中川 薫

東京都立大学人文社会学部

【目的】

医療的ケアを必要とする重症心身障害児・者（以下、重心児・者）の母親が就労の際に活用していた資源を、特に2つの場面、すなわち、①子の体調が悪化した時、あるいは悪化しそうな時、②療育、通院、などの専門機関への頻繁なる付き添いの時、に焦点をあて、インタビュー調査の結果から明らかにすることが本研究の目的である。また本研究は、医療的ケア児支援法施行前の状況を明らかにするものであり、同法施行後と比較し、変化をみるための資料としたい。

【方法】

対象は、首都圏近郊の障害児者の療育施設に依頼し、医療的ケアを必要とする重心児・者の母親で、就労経験のある人を紹介してもらい、協力の了承を得られた人、これに加えて、この人たちから同じ条件に合う知人を紹介してもらい、協力の了承を得られた合計8人で、これら8人の母親に対して半構造化インタビューを行った。許可の得られた場合に録音し、文字起こしをしたものをデータとした。

【結果】

この2つの場面は、医療的ケアを必要とする重心児・者の母親が就労の際に困った場面として特に多くあげられたものである。①体調が悪化した、または悪化しそうな時、医療的ケアスコアの高い子の母親の場合は、医療施設を併設するケア代替施設を活用していた。この施設は、医学的重症度の高い子を最大限受け入れ、体調悪化時にも受け入れ、悪化時には医療的処置も行っていった。あるいは、勤務時間と勤務場所の柔軟性を持ち合わせた勤務スタイルを活用し、体調悪化時や悪化しそうな時に母親が全面的に子のケアを行う母親もいた。医療的ケアスコアの低い子の場合は、ヘルパーやベビーシッター、家族など、通常の育児と類似した資源を活用することができた。②専門機関への付き添いは、柔軟な勤務スタイルで有効に対処できる場合、あるいは他の家族員が代わりに療育に連れて行くなど、母親だけでない担当者をおくことで対処している場合があった。

【考察】

先行研究における他の障害児・者の母親が活用する資源と比較して、本研究の対象者の子のような医療的ニーズの高い場合に母親が活用する特徴的な資源として、医療施設を併設するケア代替施設があった。また勤務スタイルの柔軟性は①②の場面の両方ともに共通する資源となっていた。コロナ禍で普及したテレワークであるが、これから多様な働き方が進展していくことが望まれる。